

徐々に広がりを見せる『eco検定』

eco検定って何でしょう？

eco検定とは“環境社会検定試験”の通称で、東京商工会議所が主催している検定です。

内容は、気候変動問題や身近なゴミ問題など、環境についての知識を問う検定試験です。

その第4回検定試験が先月実施されましたが、受験申込者は過去最高の18,600人を数えました。



地球温暖化など環境問題を最重要課題と位置づけた『北海道洞爺湖サミット』などもあり、日本国民の環境への関心が高まっている事が一因になっているとみられます。

合格者は“**エコピープル**”の称号がもらえます。この称号は、『幅広い環境問題に対する基本的な知識を持ち、そこから生まれる問題意識を日常の行動に移そうとしている人、またはすでにそうした活動を行っている人』と認定されたという意味を持ちます。

最近では会社全体で環境教育や啓発の一環として受験する企業も増えてきている傾向にあるそうです。



また大学生など20代の受験者比率も高まってきており、若者の環境に対する関心も高まっているようです。

次回の受験は12月の予定で、全国176のエリアで実施しておりますので、皆様も“エコピープル”目指して参加してみても如何でしょうか？



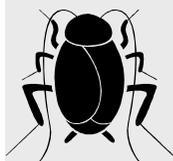
ゴキブリ小話① ～ゴキブリの成長過程～

虫嫌いの人の中には、カブトムシもゴキブリも大差ないと言う人もいます。

黒光りするボディ、シャカシャカ動く足といい、どちらも苦手な方には耐えられないかもしれません。

しかしこの2つの虫は、成長過程は大きく異なります。虫の成長過程には、大きく分けて『完全変態』と『不完全変態』の2種類があります。カブトムシが前者にあたり、ゴキブリは後者にあたります。

完全変態とは、<卵⇒幼虫⇒蛹（さなぎ）⇒成虫>と成長するにあたり形態を変えていきます。



一方、不完全変態とは、幼虫から蛹を経ずに、脱皮を繰り返し成虫になります。



株式会社 FCC

住所：神奈川県藤沢市辻堂元町4-3-32

電話 0466-31-3164

FAX 0466-31-3174

URL <http://www.fccsystem.co.jp>

E-mail info@fccsystem.co.jp

FCC News

2008年8月号

NO.0055



目次

本紙

ブドウ球菌

ノミ抑制の為に

徐々に広がりを見せる『eco検定』

ゴキブリ小話①

別紙

季節のムシ暦

環境コラム

ブドウ球菌



6月から徐々に感染者を出し、これからピークを迎える食中毒に『ブドウ球菌』があります。

ブドウ球菌は汚染した食品中で毒素を生成し、食中毒を引き起こします。生成された毒素は熱・乾燥に強く、強い酸性やアルカリ性の中でも増殖します。

症状

感染後3時間以内に発症し、吐き気や激しい嘔吐、腹痛、下痢等の症状が出ます。



但し、基本的には24時間以内に回復しますが、脱水症状を引き起こしてしまうと、点滴等の処置が必要になります。

また、食中毒の原因となるだけでなく、傷口を化膿させる性質もあります。

予防の為に・・・

ブドウ球菌は殆どの場合、菌が調理する人の手から食品に伝わり、食品に取り込まれます。



○徹底した手洗いというが、消毒をします。
また、消毒後に前掛けや布巾などで手を拭くのは厳禁です。

○手指に傷のある人が直接調理をするのは避け
ます。

○調理後は、器具の熱湯や漂白剤で消毒しまし
ょう。

○マスクや帽子、薄手のゴム手袋を着用して調理
をすると効果的です。

○調理後は出来るだけ早めに食べるようにしま
しょう。室温での放置は厳禁です。

ブドウ球菌は他の食中毒と違い熱や乾燥に強い
為、加熱調理では予防になりません。徹底して、
2次感染の防止に努めましょう！！

ノミ抑制の為に



夏真っ盛り。様々な虫も活動を活発化
させています。ノミもその1つで晩春
から晩夏にかけてよく発生します。

ノミの生命力は甚だ強く、吸血なしでも、
100日程度生き延びます。また、暖かく湿
度の高い場所を好みます。



ノミはカと同様に、吸血の際に血液凝固を防ぐために
唾液を体内に入れます。痒みを引き起こし、アレルギー
性の皮膚炎を発症します。

また、ノミは様々なウィルスを媒介する為、伝染病を
広める事もあります。

対策

ノミ駆除に有効な殺虫剤の殆どは成虫のみを対称にし
たものであり、卵や蛹には効き目があまりありませ
ん。

駆除しても駆除しても次々と出てくるの
はこの為です。



☆屋内の掃除の徹底

掃除すべき卵や蛹は部屋の角や家具の陰、湿気の多
い場所のゴミや埃の中などにいます。また、畳の縁
やカーペットの裏等にも潜り込んでいる事がありま
すので、注意が必要です。



また、布団や座布団には、汗や皮脂、フ
ケ、ノミやダニの糞や死骸があり、それ
を食料にノミはやってきます。

布団や座布団は叩いても、実際には殆ど取れない
そうです。布団や座布団に付着するこれらの汚れ
は、叩くよりは掃除機で吸う方が効果があります。



普段掃除の行き届かない場所に生息すると
いっても過言ではありません。徹底した掃
除こそ最大の対策なのです。

掃除の際には同時に、布団や座布団、畳の天日干し
を行って下さい。

天日干しにより、日差しを嫌ったノミが逃げていき
ます。夏の強い日差しの中ならば2時間ほど行えば
大丈夫です。途中で裏返して頂き両面を日に当てる
のが最良です。

徹底した掃除と天日干しで、薬剤に頼
らずに、ノミによる被害を最小限に抑
えましょう。



但し、一度駆除・抑制に成功したとしても環境が元
通りになってしまえば、再び繁殖を許してしまいま
す。

徹底した掃除は駆除・抑制に成功するまでではな
く、永続的にきれいに保つ事が重要です。

季節のムシ暦 ⑨

著者 医学博士・農学博士 林 晃史

ザ・コックローチ、それは厨房のペストの王様

以前、ゴキブリ防除は、「冬期防除」の話をしたが、今、その必要性が、再確認されるシーズンを迎えた。この所、梅雨冷と夏が、交互にやってくるためか、ゴキブリの出没が目立っている。

「昨年、ゴキブリ入りラーメンを供し、お客様に怒られたラーメン屋さんか、「冬期防除」を採り入れ、今の所、全く問題が無いと云う。

この成功はうれしい話だが、早くも学校給食の「パン」に、ゴキブリが混入していたと相談が来た。

パンの製造業者は、毎年、定期的なゴキブリ防除を実施しているが、何故、こんな事になったのか、納得しかねていた。

問題なのは、会話の中であがえた「定期的」に実施していると云う、形式に依存している点である。

ゴキブリと云う「ペスト」は、そんな簡単な虫では無い。その歴史は、なんと約3億年前の石炭紀の後期に、人間よりも先に地球上に姿を見せ、今に至る。

また、ゴキブリは世界に広く分布するが、この原産地はアフリカで、「奴隸船」で海を渡って伝播した、したたかを持っている。

その仲間は、世界で約3500種におよび日本でも30種が知られている。しかし、家屋内で問題になるのは、そんなに多くは無くても数種である。

ゴキブリで話題になるのは、「1匹、姿を見かけたら10匹はいる」と云う話がある。

これは、それ程、繁殖力と潜伏力があると云う事である。

増え方の論述は、雌ゴキブリのお尻にくっついた卵鞘（卵）にある。実は、1個卵鞘中に15〜40個の卵子を蔵している。

ゴキブリの年間産卵数は、チャバネゴキブリが約2000個、クロゴキブリが約300個、ワモンゴキブリで約800個と称されている。

何れにしろ、その増殖力は尋常なものではない。不十分な防除は、次世代の異常発生のお温床となる例がすくなくない。

ゴキブリの防除は、その発育所用日数などをよく理解しておく必要がある。発育の多い、通年活動のチャバネゴキブリで再認識したい。

*卵期間-----17〜35日

*幼虫期間-----42〜217日

*雌成虫寿命-----98〜182日

*卵↓成虫所要日数-----90〜105日

室温が、27〜30℃となれば、短いサイクルで発育を繰り返す。

徹底防除は、清掃（防虫清掃）、監視、適切な措置、監視の継続的な反復である。ゴキブリ退治は、定期的な防除や姿を見ての駆除では無く、「冬期防除」が、不可欠なのだ。反面、パン製造業者、この意見納得したと云う。



【写真説明】

ザ・ゴキブリ！！

この虫、筋金入りの不潔なものの運び屋の大物なのだ

環境 コラム ～カーボンオフセット～

最近、環境に関するキーワードを売りにしたサービスや商品が増えつつあります。

その中の1つである、“カーボンオフセット”という言葉を目にした事があるのではないのでしょうか？

簡単に説明させて頂きますと、 **モノやサービスを購入したとき**

に、二酸化炭素を吸収する樹木の植林や自然エネルギー発電に使用する費用を上乘せして支払い、二酸化炭素を理論上増やさない”という考え方です。

自分たちが生活する為に使用するモノを作る上で、発生した二酸化炭素をその分減らす為にお金を支払う事はいい事だと思います。

しかしその一方、企業においては「二酸化炭素排出に見合っただけの代償を支払っているのだから」と、削減の為の努力を怠り、カーボンオフセットの本来の目的である二酸化炭素削減に結びつかない恐れがあるという見解もあります。

先日開催された北海道洞爺湖サミットでも、中期目標で全ての先進国で排出量の絶対的削減を達成する為に、中期の国別総量目標を実施する事で合意しています。

また、長期目標で2050年までに世界全体の排出量の50%を達成すると言う目標をUNFCCC（気候変動に関する国際連合枠組条約）の全ての締約国と共有し、採択をする事を求めています。

日本は以前から、2050年までに排出量50%カットを訴えています。

しかし現状としては、世界屈指のエコ技術を持っているのにも係らず対策は遅々として進んでいない印象を受けます。

それは欧州などに比べ、国や企業の環境に対する意識が低い表れではないでしょうか？

地球温暖化による危機が目に見え、また肌で感じられる今、はたして排出した二酸化炭素を埋め合わせるというプラスマイナス0の対策だけではなく、もう一歩進んだ対策の必要性を感じています。

様々な地球温暖化対策やエコライフに取り組んでいる欧州諸国から学べるべきものは山のようにあるのではないのでしょうか？

